

研究課題・発表者一覧

司会者 趣旨説明者	発表者	発表題	記録者	運営責任者
【米沢】 高砂 晃 (米沢市立 万世小学校)	【米沢】 小池 直人 (米沢市立 松川小学校)	教職員のウェルビーイングを目指した、 魅力ある学校経営について ～ＩＣＴ等を活用した新しい学校経営の推進～	【米沢】 田中真由美 (米沢市立 広幡小学校)	【鮑海】 金子 尚 (酒田市立 八幡小学校)
【西置賜】 小野 明彦 (長井市立 長井小学校)	【西置賜】 服部 宏司 (長井市立 平野小学校)	豊かな人間性を育む 教育課程の推進	【西置賜】 渡部美千恵 (長井市立 豊田小学校)	【鮑海】 石垣 学 (酒田市立 浜田小学校)
【西村山】 白田 敏幸 (河北町立 谷地西部小学校)	【西村山】 矢作 誠 (大江町立 本郷東小学校)	学校の教育力を高める マネジメントの在り方 ～担任力を高める研修の推進と校長の役割～	【西村山】 宮部 卓 (河北町立 溝延小学校)	【鮑海】 是谷あゆみ (酒田市立 浜中小学校)
【田川】 村上 久夫 (庄内町立 余目第一小学校)	【田川】 生田 弥恵 (鶴岡市立 大山小学校)	教職員の危機管理意識を自分事に高め、 課題に応じた対応ができる 組織づくりと校長の役割 ～子どもの命を守りぬくために～	【田川】 齋藤 優子 (鶴岡市立 鼠ヶ関小学校)	【鮑海】 小松 泰弘 (酒田市立 琢成小学校)
【東村山】 荒井 孝 (中山町立 長崎小学校)	【東村山】 高橋 徹 (天童市立 天童南部小学校)	小・中を核とした よりよい連携・接続のための 校長の在り方	【東村山】 佐藤美和子 (天童市立 寺津小学校)	【鮑海】 梶原 勝 (遊佐町立 遊佐小学校)

◆ 第1分科会【学校経営】経営・組織・運営 ◆

教職員のウェルビーイングを目指した、魅力ある学校経営について

～ICTを活用した新しい学校経営の実現～

小 池 直 人（米沢市立松川小学校）

1 はじめに

令和5年6月に閣議決定された教育振興基本計画のコンセプトは、「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」である。私たち校長が、学校経営を通してこの2つのコンセプトを実現するためには、学校が活力あふれる場であること、そこで働く教職員が生き生きと力を発揮できることが必要と考える。

そこで、私たち米沢市小学校長会は、教職員のウェルビーイングと、それにつながるICTの効果的な活用について研修を深め、各校の学校経営の充実を目指し、組織的な研究を行った。

2 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① ウェルビーイングの考え方や、校務DXのあり方について理解を深める。
- ② 各学校の現状を把握・共有し、ウェルビーイングの実現に向けた改善策を探る。
- ③ 各校の現状に応じて実践した取組を共有し、成果や課題を明らかにする。

(2) 研究の方法

- ① 令和5年度（1年次）
 - ア ウェルビーイングについての研修
 - イ 実態把握
 - ウ 各校の現状共有
- ② 令和6年度（2年次）
 - ア 各学校での実践
 - イ 成果と課題の確認

3 研究の内容

- (1) 研修を通してウェルビーイングや校務DXについての理解を深めた。
 - ① 教育振興基本計画について、資料閲覧や動画視聴等を通して理解を深めた。
 - ② 校務DXの推進について、市教委担当者と情報を共有した。
- (2) 教職員のウェルビーイングや校務のDXに

ついて、以下の事項について実態把握を行った。また、ICT活用による実態集約の方法についても研修した。

- ① ストレスチェックから
 - ② 時間外在校等時間調査から
 - ③ 教職員の意識調査から
 - ④ 校務DX化チェックリストについて
- (3) 校長会での研修をもとに各学校の実情に合わせた実践を行った
- ① A小学校の実践
 - ・校務支援ソフトを活用して職員会議、打ち合わせをペーパーレス化
 - ② B小学校の実践
 - ・保護者からの情報（欠席等の連絡、アンケート等）をデジタル化
 - ③ C小学校の実践
 - ・クラウドを活用し、学校の情報を集約・有効活用・共有

4 成果（○）と課題（●）

- 第4期教育振興基本計画についての理解を深めることができ、今後の学校経営に生かす多くの視点を得ることができた。
- GIGAスクール環境を生かした学びを実現するためにも、校務のDX化は必要不可欠である。校長自らが研修を通して理解を深めることができた。
- 校務DX化は、各校独自の創意工夫に任せられているが、人事異動があることを考えると、ある程度は同じシステムを構築する必要がある。今後も市教育委員会と連携しながら、よい取組みを共有していきたい。

5 提 言

ICTを活用した働き方改革を
教職員のウェルビーイングにつなげること
↓
児童・学校全体のウェルビーイングに

◆ 第2分科会【教育課程】豊かな人間性 ◆

豊かな人間性を育む教育課程の推進

服部 宏 司（長井市立平野小学校）

1 はじめに

少子高齢化に伴う人口減少や価値の多様化など、子どもたちがこれから生き抜く社会には課題があふれている。

本地区では、「長井の心」【1 長井を愛し、誇りに思う心、2 感謝と思いやりに満ちた心、3 真摯な精神で創造する心、4 倫理を大事にする心】を柱に、社会が変動しても、子どもが夢を大切に生きて、幸せや生きがいを感じながら生きることができるよう豊かな人間性を育成してきた。

本研究では、これまでの実践を分析し、「豊かな人間性」を育むカリキュラム・マネジメントを行うための校長の在り方について探っていく。

2 研究の概要

(1) 研究のねらい

長井市の学校教育の特徴である「長井の心」等の実践事例の収集・分析・考察を通して、豊かな人間性を育む教育課程を明らかにするとともに、校長の在り方について探る。

(2) 研究の経過

- ① 研究主題、趣旨、内容等の設定
- ② 現状と課題の把握
- ③ 実践と成果・課題の整理
- ④ 研究のまとめと成果・課題の共有化

3 研究の内容

① 教科横断的な視点による教育課程

ア：社会科、総合的な学習、国語科の教科横断による郷土愛の育成

イ：外国語活動と国語科の教科横断によるコミュニケーション力の育成

② PDCAサイクルの確立

ア：働き方改革や教員の研修の場の確保に向けたPDCAサイクル

イ：特別支援教育でのPDCAサイクル

③ 学校内外の資源の活用

ア：コミュニティースクールからスクールコミュニティへの推進

イ：特別支援学校や児童センターとの交流

4 成果と課題

(1) 成果

- ① 校長が学校の特色や児童の実態を的確に把握し、教科横断的な視点による教育課程を実施したことで効果的・効率的に豊かな人間性を育成することができた。
- ② PDCAサイクルを迅速に回すことや共有することで、学校全体で時間確保や児童の適切な支援につなげることができた。
- ③ 対外的渉外が必要な学校外の資源活用での校長の役割は大きい。校長も積極的に情報収集し、それを教職員に提供する必要がある。学校外の資源には多様な視点や価値があり、児童の意欲に結びついている。

(2) 課題

- ① 教科横断的な視点による教育課程や学校外の資源活用を進める目的を校長が明確に示し、教職員に共有させる必要がある。
- ② 全国学力学習状況調査の質問紙の結果が、「今住んでいる地域の行事に参加していますか」の質問に「当てはまる」が全国比プラス37ポイントだった。しかし、「人が困っているときは、進んで助けていますか」など豊かな人間性に関する質問では全国比マイナスポイントだった。これについて分析し、具体的方策を考える必要がある。

5 提 言

「豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメントの推進」

(1) 豊かな人間性の評価を明確にする。

数値で示される調査の評価に加え、児童一人一人の変容を見取り、校長は実態と方向性を明確に教職員に示す。

(2) 組織を構築する。

校長が示す方向性を教職員に常に意識させ、一丸となって目標に向かう組織を構築する。学校だけではなく、地域なども含めた組織を構築する。

◆ 第3分科会【指導・育成】研究・研修 ◆

学校の教育力を高めるマネジメントの在り方

～担任力を高める研修の推進と校長の役割～

矢 作 誠 (大江町立本郷東小学校)

1 はじめに

近年、教職員の大量退職・大量採用の傾向が続き、これまで脈々と受け継がれてきた教職員の知識・技能の伝承が困難な状況が起きている。そのため、学校教育の使命や責務を果たしていくには、教職員一人一人の指導力向上を図るとともに、質の高い教育をチームとして実践する学校づくりが必要である。

そこで、若手教員やミドルリーダーの資質・能力の向上、育成を図るための校内外における研修体制の充実と、学校の教育力を向上させていくための校長の役割について研究していくこととした。

2 研究の概要

(1) ねらい

西村山管内の小学校に所属する若手教員(20・30代)の教育活動に関する意識等の実態を把握するとともに、若手教員の資質・能力の育成を効果的に行うために、校長としてどのように関わり指導していけば良いのか、その方向性を明らかにする。

(2) 研究の経過

① 1年次(令和4年度)

- ア 各校の研修に関する実践事例交流
- イ 研究の方向性についての検討

② 2年次(令和5年度)

- ア 実態把握のための校長・若手教員対象意識調査の実施
- イ 各校における研修に関する実践事例の収集

③ 3年次(令和6年度)

- ア 研究のまとめと成果・課題の共有化
- イ さらなる実践の積み上げ

3 研究の内容

- (1) 西村山管内校長と若手教員(20～30代)を対象とした「研究・研修」に関する意識調査(アンケート調査)とその分析

- (2) 若手教員のニーズを踏まえた各校における研修の実践とその情報共有
- (3) 研修の実践や情報共有を通じた若手教員のネットワークづくり
- (4) 若手育成のための校長の役割の再認識
- (5) 若手教員のニーズを踏まえた校長会主催の講演会の企画・開催
(R5外国語教育・R6特別支援教育)

4 成果と課題

- 地区上げて、若手教員の研修ニーズや困り感等、生の声を幅広く拾い上げることができた。
- 校長と若手教員双方へのアンケート結果から、教育活動に関する様々な認識や意識にずれがあることに気づくことができた。
- 一部地区では、若手教員による同世代間の交流が図られ、勤務校を超えたつながりが生まれた。自身の悩み等に直接かかわるような答えを得ることもつながった。
- ▲アンケート結果を受け、各校長がどのように判断し、若手教員の研修ニーズをどのように実現したか、それらの実践と成果の積み上げを図る必要がある。
- ▲実践に関する情報共有を効果的に行うことにより、次の効果的な実践が期待できるものと考えられる。情報共有の具体化をどのように行うか検討していく必要がある。

5 提 言

若手教員の育成にかかる校長としての意識の転換や見直しを図るとともに、育成を推進するための方針や方策を具体化し、必要に応じてアップデートしていく必要がある。

◆ 第4分科会【危機管理】危機対応 ◆

教職員の危機管理意識を自分事に高め、 課題に応じた対応ができる組織づくりと校長の役割 ～子どもの命を守りぬくために～

生 田 弥 恵（鶴岡市立大山小学校）

1 はじめに

子どもの命を守るため、校長には教職員の高い危機管理意識と危機対応能力を育成することが求められている。

しかしながら、実際に学校が対応しなければならない危機は様々のため、学校の危機対応は十分とは言えない現状がある。また、近年は経験の浅い若手教員が増加する中で、様々な危機に対応する能力の育成や未然防止の組織づくりが追いついていないことが課題であると考ええる。

2 研究の概要

(1) 研究のねらい

本研究では、管理職と同じ意識で危機を自分事として捉えられる人材の育成と、課題に応じて適切な対応ができる組織をつくるための校長の役割について追究していく。

(2) 研究の方法

- ① 研究の概要と方向性についての協議
- ② 各校での実践と校長会での情報の共有
- ③ アンケートによる課題把握と実践事例の集約
- ④ 研究のまとめと提言

3 研究の内容

(1) KJ法による現状と課題の共有

田川小校長会の課題研究委員会において、危機管理意識の育成と課題に応じた組織づくりについて、KJ法を用いて各校長が捉えている課題を把握し、情報の共有を図った。

(2) アンケートによる各校の取組みの集約

地区内34校の校長に危機管理についてのアンケートを実施し、以下の内容を調査した。

- ① 教職員の危機管理意識を自分事に高めるための取組み
- ② 各種危機管理マニュアルの見直し
- ③ 新たな課題となっている事案への対応
- ④ 各関係機関との連携

(3) 校長の役割の現状

① 危機管理意識を自分事に高めるために

- ア 情報収集と情報発信
- イ 実際の事案に基づく事例研修
- ウ ナレッジマネジメント
- エ 担当者の責任の明確化 など

② 課題に応じた対応ができる組織づくりのために

- ア マニュアルの見直し・作成・活用
- イ 外部指導者の活用
- ウ 避難訓練等実施後の評価・課題・改善点の明確化
- エ 学校運営協議会の活用 など

4 成果（○）と課題（●）

○アンケートを実施したことにより、各校にとっては自校の取組みについて振り返りの機会となった。

○各校の取組みを集約し、共有したことで、自校にはない新たな視点が生まれ、自校の危機管理の参考にすることができた。

●過去や他校の事案に学ぶことの大切さは理解されていても、時間の経過とともに意識が薄れ、学びとして蓄積されていかない。

●校長や教職員の人事異動を考えると、学校の枠を越えて、教職員の危機管理意識を高めていく地域全体の取組みが必要である。

5 提 言

(1) 危機管理意識を自分事に高めるためには、校長が日頃から危機管理についてのアンテナを高くし、常にリーダーシップを発揮するなどの不断の努力が肝要である。

(2) 課題に応じた対応ができる組織づくりを持続的に行うためには、人事異動などで人が変わっても、機能する危機管理のシステムを構築することが校長には求められる。

◆ 第5分科会【教育課題】社会との連携・協働 ◆

小・中を核としたよりよい連携・接続のための校長の在り方

高 橋 徹 (天童市立天童南部小学校)

1 はじめに

昨今の児童生徒に関する課題はますます複雑化している。そのため、義務教育の在り方を校長が中心となって再構築し、小中9年間のスパンで課題解決を図っていくということも今まで以上に重要になっていると考える。

2 研究の概要

(1) 研究のねらい

小・中を核とした異校種間の連携の取組等进行分析し、学校教育の本質を追究するとともに、連携・接続を効果的・組織的に推進していく上での、校長の果たすべき役割と指導性を究明する。

(2) 研究の経過

① 1年次(令和3年度)

- ア 異校種連携についての実態調査
- イ 小中連携等において「特に重視したいこと」についての意識調査
- ウ 小中連携等における「校長の果たすべき役割」についての意識調査

② 2年次(令和4年度)

- ア 異校種連携についての実態調査
- イ 中学校区ごとの具体的な取組

③ 3年次(令和5年度)

- ア 研究の成果と課題の共有・整理
- イ 研究成果の継承と課題解決に向けた取組

3 研究の内容

- (1) 地区内中学校区ごとに、令和5年度初めに共有・整理した以下の研究の成果(○)と課題(●)と「県教員指標 校長用」にある「経営・組織マネジメント力」を踏まえた連携実践に取り組む。

【学校経営力】

- 校長間の情報や理念の共有と学校経営への反映

●校長間の連携強化と工夫した実践

【人材育成力】

- 担当教職員の意識向上による活動の質の向上
- 他校の教職員への助言などによる、ミドルリーダー等の人材育成

【連携協働調整力】

- 連絡調整しながら、できることを模索して実践

●教職員・児童生徒・地域家庭の理解の深化と、成果と課題の再確認

- (2) 上記①の実践について「経営・組織マネジメント力」の3視点から成果と課題を明らかにする。

4 研究の成果(○)と課題(●)

- 小中校長による情報共有、理念の擦り合わせ等を密に行ったことで、工夫して連携を図ることができた。(学校経営力)

- 連携による教育活動のねらいを明確に示し、それを主導する担当教職員にしっかりと伝えることで活動の質が向上した。(人材育成力)

- コロナ禍明けということもあり、関心やニーズを的確に把握し、連携の意味などについて再考察して連携を図ることができた。(連携協働調整力)

- 町や市、中学校区における「ビジョン」「育みたい資質・能力」などについて、十分な共通理解を図り、形骸化しないような連携活動にしていくこと。(学校経営力)

- 今後も、自校の教職員のみならず担当する他校の教職員にも適切な助言を行うことで、ミドルリーダー等の人材育成を図っていくこと。(人材育成力)

- 連携に関わるすべての人間(教職員・児童生徒・地域・家庭)が連携の意味やねらいをしっかりと理解し、納得した上で活動に取り組めるようにしていくこと。(連携協働調整力)

5 提 言

- (1) 異校種間等の連携・接続では、校長間による理念やビジョンなどの共有と形骸化を防ぐための工夫した取組が必要である。

- (2) 連携・接続に関わるすべてがそのねらいなどを理解して取り組めるよう、人材育成を含め校長がリーダーシップを発揮することが大切である。